

第44回埼玉県医学検査学会
開催にあたって

がんを識(し)る

学会長 岩田 敏弘



このたび、埼玉県臨床検査技師会の熱意あるご推挙により、第44回埼玉県医学検査学会の学会長を務めさせていただくことになりました。大変光栄であると同時に、過大な務めに身が引き締まる思いです。また学会を準備するにあたり、県立病院、がん診療連携拠点病院から非常に優秀で若さと能力溢れる実行委員を推薦いただきましたこと、感謝いたします。さらに埼玉県、さいたま市、埼玉医師会をはじめとする各団体の皆様からご後援いただきましたこと重ねて御礼申し上げます。

さて、学会を引き受けるにあたり、今学会を皆様の「記憶に残る学会」にするため、「がんセンターの部長がやるのだから、学会企画をがんに特化した検査学会とする」と明言いたしました。そのために、私は3つのビジョンを提案しました。まず「がん診断の最前線を知る」次に「がんそのものを知る」3つ目が「がん患者さんを知る」ということです。そして3つのビジョンがひとつの形を成したとき「知る」が「識る」となり、「がんを識る」というメインテーマが成立すると考え、企画を進めてまいりました。

まず近年、さまざまな診断方法が「がん早期診断のための次世代プロジェクト」としてマスコミを賑わせています。私たちは数年後の未来に実用可能な診断技術として、がんの特異的な mi-RNA の存在に注目していました。学会に先立って、県立がんセンターで2度の事前研修会を行い、県立がんセンター検査技術部・医局・研究所合同カンファレンスで落谷孝広先生（国立がん研究センター）にご講演いただきました。その時の「mi-RNA 診断技術」が臨床検査技師の将来を左右するテーマであると確信し、今回学会特別講演をお願いしました。ご多忙の折にもかかわらず、快く講演をお引き受けいただき感謝いたします。

次に、国民の2人に1人ががんに罹患し、3人に1人ががんで死亡する時代に、自分の身の回りに起こりうることとして、がんを知って欲しいという気持ちが強くありました。それをどう形にするか議論を重ねましたが、一般市民の皆様をはじめとして、参加するすべての人々が、「がん」の抱える問題を認識し、また心の葛藤を共有できるように、「がんと言われた日に」というテーマで市民公開シンポジウムを企画しました。メンタルケア、ソーシャルケア、メディカルケアというそれぞれの立場からお話いただけますが、シンポジストの3名はがん患者支援の分野でもとても有名な方々です。特に勝俣範之先生は「医療否定本の嘘」など多くの著作があり、通常の診察の傍ら、全国を飛び回って医療の啓発を行っておられ、先日都内のイベントの後にお会いする機会があったときも、盛岡での

イベントのその場で直接来られたとのことでした。取りまとめを行う座長には経験豊かな熊木孝子埼玉県看護協会会長にお願いしました。またがんを識る会員向け企画として若い実行委員から「クイズ方式でがんを知るのはいかがでしょうか」と発案がありました。学会にクイズ形式というイベントは斬新で興味深いものだと思います。各研究班の創意工夫で、どのような内容になるか、どのような反響があるか興味と共に期待が高まる場所です。

3つ目に、学会には学生さんも参加されます。また職場環境上、患者さんと向かい合ったことのない検査技師もおられます。そういった方々は実際に患者さんや患者さんから得られる検体をどのように捉えているのでしょうか。

「がんサバイバーとしての体験をもとに、特に若い医療者に望むことを語って欲しい」

大宮アルディージャで選手として活躍されている時にがんを発症し、それに立ち向かっている塚本泰史さんに講演をお願いしました。「夢へのサポーターであれ」ヤングジェネレーションセミナーと銘打っていますが、すべての医療者に聞いて欲しい話です。

ともすれば若手の登竜門として扱われがちな地方学会ですが、一般会員、学生、賛助会員の皆様の熱意により、一般演題114題、CM演題16題と地方学会では傑出した演題数を擁し、11会場を使用するという大規模な学会となりました。前述したとおり、学会の企画内容と講演していただく講師の先生方は、全国学会レベルです。さらにランチョンセミナーは賛助会員の皆様がメインテーマを斟酌した企画を立案して下さり、野地博行先生（東京大学工学研究科）、小松淳子先生（日本赤十字社医療センター）、村上純子先生（埼玉協同病院）などそれぞれの領域で活躍中の講師をお招きいただきました。また今回特別に、日本臨床衛生検査技師会から宮島喜文会長にご講演いただくことになりました。これも「記憶に残る学会」を共に創るといふ、皆様の熱意の賜物と感謝いたします。

さて皆さんは、リレー・フォー・ライフ（RFL）というイベントをご存知でしょうか。がん患者



さんと若い医療者を支援し、がんで亡くなった人を悼むボランティアイベントです。今回、9月12日（土）・13日（日）にRFLさいたまが開催されましたが、学会（市民公開シンポジウム）の宣伝を兼ねて、実行委員を中心とした有志でチームを結成し、24時間交代でバナーをつなぎました。多くのがん患者さん、それを支援する人たちと出会えたこと。RFLでの経験は、今学会のもう一つの車輪として、「がんを識り」、自分を見つめなおす機会となりました。何より総勢82名もの有志が参加していただけたことに将来の光を見た気がします。

最後になりますが、皆様におかれましては、どこを取ってみても「がん」に関連するという初めての試みをぜひ堪能いただくとともに、「顔の見える臨床検査技師」また「患者さんの良きサポーター」として、明日からの日常業務にお役立て願えれば幸いです。

12月6日（日）、実行委員一同、皆様の参加をお待ちしております。大宮ソニックシティでお会いしましょう。